

同潤会代官山アパート

—戦前の集合住宅—

概要

財団法人同潤会は、関東大震災の復興を目的に大正13年(1924)に設立された公的な住宅供給団体です。電気やガス、水洗便所を備えた鉄筋コンクリート造のアパートメントは、わが国における近代的な集合住宅のさきがけとなりました。昭和2年(1927)に入居がはじまった代官山アパートの世帯住戸と独身住戸を復元展示しています。

■ 関東大震災と同潤会アパート

大正12年(1923)の関東大震災の住宅の復興を目的に、義捐金をもとに内務省の外郭団体として設立されたのが財団法人同潤会です。同潤会は、住宅不足を補うため直ちに木造住宅の建設を着手。その後、大正15年(1926)からは、耐震耐火のアパートメントを建設、入居が始まります。同潤会のアパートは、当時まだ珍しかった鉄筋コンクリート造の建物に、狭いながらも、ガスや水道、水洗便所を備えた賃貸住宅として新しい生活様式を提示。10年間に東京と横浜の16箇所に約2,800戸を供給しました。下町の罹災者への住宅供給を目的とした清砂通りや柳島、震災被害の少なかった山の手地域では新たな都市生活者階層向けに、新しい都市生活様式として供給された青山や代官山、都市居住の三田、上野下、鶯谷、单身専用の虎ノ門、大塚女子のように場所により様々なタイプがありました。昭和9年には当時東洋一といわれた江戸川アパートメントが建設されました。



写真 同潤会アパート16の模型

■ 住宅の特徴

住戸規模は、世帯向けでも30㎡未満と、現在の1DK程度ですが、当時としては珍しかった水洗便所をはじめ生活用具の全てが完備されていました。同潤会十八年史には次のように紹介されています。

- (イ) 鉄筋コンクリート造にして地震に安全なる事。
- (ロ) 世帯向けのものは各戸毎に不燃質の障壁を設け且出入口は防火壁となし火災に安全なること。
- (ハ) 建具を堅固にして戸締に意を用ひ盗難の不安少なきこと。
- (ニ) 内部の構造は和洋の様式を自由に選択し得ること。
- (ホ) 水道電気は勿論炊事及び暖房用の瓦斯の設備あること。
- (ヘ) 便所は各戸毎に設け水洗式となしたること。
- (ト) 屋上に洗濯室を設け盥及び物干しを設備したること。
- (チ) 釜所には流しは勿論調理釜、籠、蠅帳等の外ダストシュートを取り付けたること。
- (リ) その他押入、鏡付洗面所、帽子掛、下駄箱、標札等に至るまで一切完備すること。



写真 当時は珍しかった水洗便所

■ 代官山アパート

代官山アパートは、昭和 2 年（1927）に入居がはじまった総戸数 337 戸の同潤会アパートメント最大規模の郊外団地です。都心から程近い場所に勤労者の住宅として計画され、起伏のある敷地を生かして、3 階建てや 2 階建て 4 戸単位の世帯向け住棟、3 階建ての単身用などが巧妙に配置されています。戦後は居住者に払い下げられましたが、共用施設の食堂や銭湯は最後まで営業を続け、地域コミュニティに貢献していました。



創建当時の代官山アパート 出典：「新興アパートメント」洪洋

■ 世帯住戸

この住戸は、代官山アパートの 3 階建ての代表的な世帯住戸を移築復元したものです。

2 つの部屋は、台所に近い部屋を茶の間、遠い部屋は主室として使うよう計画されていて、主室には床の間が付けられています。台所は土間になっていますが、流し台、ガスコンロ台をはじめとして調理台、ダストシュート、米櫃、炭櫃まで備え付けられていました。トイレは和風の水洗式ですが照明は無く、夜は玄関照明の明かりで用を足していました。避難用の縄梯子を設置し、玄関の扉は鉄板を巻いて防火性能を持たせるなど、地震や火災への対策がとられています。



写真右 台所

■ 独身住戸

この住戸は、代官山アパートの独身住戸（和室型）を移築復元したものです。床は和洋どちらの生活にも使えるようにコルクの上に薄縁を敷いています。作りつけのベッドや換気口、各所にもうけられた収納などに、住みやすさへの細かな工夫が見られます。トイレや洗面は共通ですが、部屋ごとにガス栓が 1 口もうけられ、お湯などを沸かすことができるようになっていました。



写真 作り付けのベッド